

# 光丘文庫報

# 光丘

No.163

## 文化資料館(仮称) 整備に至るまで

酒田市立資料館館長 岩浪勝彦

私が図書館に配属され、光丘文庫の事務担当となったのが平成二十八年四月のこと、この年は前年度に決定した中央図書館の駅前移転に向けて本格的に動き出した年度であり、加えて築九十年を超え、老朽化した山王森の光丘文庫から所蔵資料を中町庁舎に移転させる年度でもあった。

もともと郷土史に多少の関心はあったものの、光丘文庫を実際に利用したことは、平成九年に発行した市立酒田病院の「創立五十年記念誌」編集のために終戦直後に発行された地元新聞を閲覧しただけで、図書館に配属されるまで光丘文庫の機能や果たすべき役割について深く考えたこともなく、古い資料がある場所という程度のイメージしか私自身も持っていなかった。

光丘文庫の所蔵資料は、遠方から来館する研究者から

は一定の評価は得ているものの、地元在住の昭和期からの研究者の高齢化が進んだことにより、年々利用者数の減少が顕著となってきた。たほか、市民からの認知度が高いとはいえず、事務担当者として、いかにして光丘文庫の認知度を向上させ、その価値を市民に理解してもらうかという課題と向き合うことになった。

事務担当という立場で光丘文庫の所蔵資料に触れることにより気が付いたことは、①この地域の歴史資料が最も充実している場所であるにもかかわらず、利用者増につながらる情報発信が弱いこと、②地域の歴史資料を求めて来館する利用者のニーズに 대응するためには、既存資料で満足することなく、より積極的な資料収集が必要不可欠であること、③時代の流れであるデジタル化による利便性向上が急務であること

と、④機能面で資料館と重複する部分が多いことなどがあった。

これらの課題を解決するために、施設の性格が曖昧であった光丘文庫を郷土史研究拠点と新たに位置づけ、「光丘文庫デジタルアーカイブ」と「光丘文庫資料データベース」を立ち上げることに、郷土史と光丘文庫に対する関心を持ってもらうための数居の低い入口を設けたほか、近代史の基礎資料である光丘文庫が所蔵する計八万ページを超える地元発行新聞紙面のデジタル化を図った。

平成二十九年度で中町庁舎への移転は完了したものの、それは所蔵資料の保存環境改善のための仮移転という位置づけであり、酒田の歩みを裏付ける歴史資料を集・保管・活用する総合的な施設としては、中町庁舎や資料館の環境では難しいことから、総合文化センターへの移転が決定したものである。なお、光丘文庫は昭和三十三年に市立図書館に統合されていた施設であり、昭和五十

三年に資料館が開館した際に当時の光丘図書館から約千九百点の物品資料が移管された経過があり、そういう意味では今回の統合によって元に戻るようになる。

また、文化資料館(仮称)は、新たな役割として歴史公文書や行政資料の保存・活用も担うことになっており、これは、公文書が市民共有の知的資源であるという認識のもとに、これまで見落とされがちであった酒田の近代史を裏付ける一次資料として市民に利用してもらうことを想定したものである。

昔から酒田人は新しいものには目を向けるが、古いものには冷淡であるといわれているが、郷土史については自治体としてやるべきことは山積している。その活動の中心となる施設として、また、酒田を訪れた人がこの土地の歴史や文化を学び、市民が自らのアイデンティティを確認し、酒田についての知識を深めることができる場所として、文化資料館(仮称)がその役割を果たしていく施設となることを心から願う。

# 日和山「文学の散歩道」の案内(五・最終)

日本現代詩人会会員 相 蘇 清太郎

酒田市日和山公園に整備されている「文学の散歩道」

は、酒田を訪れた文人墨客や酒田ゆかりの俳人、歌人、詩人などの文学碑二十九基が、散策しながら鑑賞できるように配置されている。第一

回・第二回は、松尾芭蕉が「おくのほそ道」の途次、酒田で詠んだ句(碑文三基)と、芭蕉と句会を共にした酒田の俳人(伊東玄順・俳号不玉、寺島彦助・俳号安種、近江屋三郎兵衛・俳号玉志)に触れた。時代は十七世紀末、元禄であった。芭蕉との交際は、酒田(鶴岡、象潟を含めて)俳諧の水

準の高さと広がりを示すものであった。前々回・前回は、現代詩・現代俳句につながる人の碑文として、酒田の詩人佐藤十弥の詩碑を、そして高知市出身で酒田で活躍した俳人秋沢猛の句碑を取り上げた。最終回の今回は、ふるさと酒田を詠った哲学者と

数学者の歌碑、高名な小説家・詩人井上靖の長編小説『氷壁』の碑文を覗てみよう。

哲学者、数学者の歌碑

哲学者伊藤吉之助(二八八

五〇一九六一)の碑文は「秋くればいではの空は雲おもくくろつむ海の浪高ならず」。戦後北海道からの帰路、母の実家に立ち寄った時の揮毫である。秋になると出羽の国の空は雲重く黒ずみ波を激しくする。ふるさとの冬に向かう重い風土にあって、むしろその風土こそ自分を育てたとの感慨を詠っているように思われる。伊藤は荘内中学から旧制一高、東京帝大へと進み哲学を研究し、東京帝国大学教授、北海道帝国大学法文学部長などを歴任。ドイツ哲学の研究、岩波『哲学小辞典』の編集、『最近のドイツ哲学』の出版などで著名で、日本哲学会会長を務めた。生家は日枝神社・旧光丘文庫から階段を下りた日吉町(旧下台町)の商家である。木村立子編集『哲学者伊藤吉之助先生の思い出』、『哲学者伊藤吉之助先生の思い出 続 今道友信先生の酒田講演掲載』、土岐田正勝執筆『酒田が生んだ哲学者 伊藤吉之助』(『方寸』第八号所収)により哲学者の学風や身近な姿をうか

がうことができる。



伊藤吉之助歌碑

数学者・教育者小倉金之助

(二八八五〇一九六二)は、船場町の廻漕問屋に長男として生まれたが、学問への志が強く荘内中学を中退して、東京物理学校に入学、東京帝国大学理科大学選科に進む。東北帝国大学助手、大阪医科大学教授、東京物理学校理事長、日本科学史学会会長、日本数学史学会会長を歴任。『近代日本の数学』など著書多く『小倉金之助著作集』(全八巻勁草書房)が刊行されている。歌碑は「山王の祭も近きふるさとの五月若葉のかぐはしきかな」。山王祭(現在の酒田まつり)を迎える時季のさわやかなふるさとを率直に詠っている。誰もが持つふるさとへの思いである。小倉の生涯については、阿部博行著『小倉金之助―生涯とその時代』に詳しい。



小倉金之助歌碑

井上靖の小説『氷壁』の碑

小説家・詩人井上靖(二九〇七〇九一)の長編小説『氷壁』は、山岳の峻厳さと人間の心理の絡み合いを描いた名作である。前穂高の冬の登山で主人公と親友を結び付けていたナイロンザイルが切れ、親友は墜落死した。主人公は親友が思いを寄せていた既婚女性を慕う。亡き親友の妹が主人公を慕い、互いに結婚を誓うが、主人公は穂高を単独登攀し落石に遭い死んでしまう。親友小坂乙彦は酒田出身。碑文には、「風が海から吹きつけているのでひどく寒かった 丘陵には松が多く 松の幹の海と反対側の面にだけ雪が白くくっついていて 二人は丘陵の上を斜めにつっ切って 日枝神社の境内へとは

行って行った 公園にも人の姿は見えなかったが 土地の人が山王さんと呼ぶこの神社の境内にも 人の姿は見えなかった 境内にはいると地面には雪が積っていた」(小説第3章からの引用)。親友の転落死を、主人公魚津恭平が小坂の妹かおると一緒に、東京から酒田の母に報告に来た時の場面である。小坂の家(鏡屋らしい商家のつくり)、小坂の母親のふるまい、日和山公園界限の様子、庄内平野・最上川の描写などよく書き込まれている。昭和六十年四月、碑の除幕式には作家ご夫妻が出席され、午後には市民会館で講演された。



井上靖『氷壁』文学碑

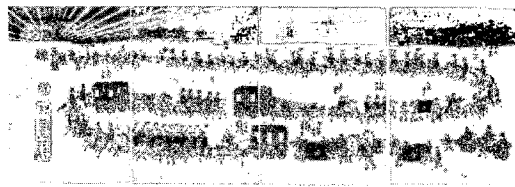
日和山公園の文学の散歩道は、酒田への思い・感懐を詠った碑文を味わうことができる。文化・芸術のまちにふさわしい文化的財産である。

# 明治・大正期にかけての交通

光丘文庫調査員 藤原由紀

江戸時代の庄内藩の参勤交代は、東北の多くの大名同様に羽州街道を通っており殿様もかごだけでなく徒歩や馬・船などで移動する様子は『方寸七号』で発表されている。

東京へ行く予定だったが官憲が探していたので徒歩で上京している。  
明治八年になると人力車が、十年に馬車・自転車・川蒸気船が流行する。  
明治十四年には、明治天皇の東北御巡幸があり馬車を使用している。



『明治天皇東北御巡幸絵図』明治14年

明治二年十月英船シンクイン号が宮野浦で座礁する。この件はアジア歴史資料センターホームページで外交文書が公開されている。酒田から横浜までの冬季間を二十八日かけて徒歩・かご・馬で戻っており、の中には女性子供も含まれていた。

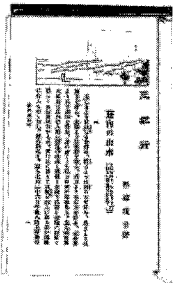
明治四年酒田―大坂間に汽船が就航した。  
明治六年から始まったワッパ騒動で中心にいた森藤右衛門は、仙台から船で

明治十九年〜大正九年には、酒田港より新潟港行の渡津丸が毎日運航されており、移動手段として利用された。  
明治二十二年には、酒田に鉄道を誘致するため、庄内鉄

道期成同盟会がつくられる。その調査に清川―酒田間を人力車や馬車で移動している請求書が残されている。

北日本では、上野から青森までを結ぶ東北本線が、明治二十四年九月に全線開通した。この路線は現在の東北新幹線に沿っている。  
明治三十年になると客馬車も走るようになる。

国文学者の沼波瓊音が庄内を訪れた『三紀行』では、明治四十一年七月に汽車で新庄(明治三十六年に開設)まで乗車し本合海までは人力車、清川までは船、そこから人力車で庄内へ入っている。福島から山形・秋田を経由し青森に至る奥羽本線が全線開通したのは明治三十八年である。明治四十四年には、酒田―鶴岡間、鶴岡―清川間の定期バスが初めて走っている。清川から本合海を船に乗り、本合海―新庄間は馬車の便があった。



『三紀行』沼波瓊音著 文成社 明治43年

明治初期は、徒歩・かごや馬などを使っているが、中旬になると人力車、馬車が使われはじめ、西洋文化が徐々に交通に影響を与えていく様子が見える。船舶も帆船から汽船へ変わりつつあった。

『庄内案内記』には、酒田より各地への馬車便の行先や酒田港より各港への汽船乗客賃金や里程表が記載されている。この図書は明治三十八年と大正四年に発行されているが、大正版では「奥羽南線の延長となり、従来この地に需要を仰ぎしもの、悉く鉄道を利用し、仙台秋田を経て東京若しくは北海道と直取引を為すに至れば、酒田港はここに昔日の観を失い」と鉄道の影響を記している。

大正期は、新庄―酒田間を結ぶ陸羽線が開通し、大正三年十二月に酒田駅が開設された。大正四年発行の『酒田市街全図』には酒田駅ヨリ汽車賃表が併記されている。酒田から東京までの汽車運賃は三円二九銭である。尋常小学校教員だった佐藤とし江日記のとし江の月給

は一六円。東京往復を考えると六円五八銭が必要となり、まだまだ一般庶民が鉄道に乗るには高額といえる。

日和山公園には大正六年八月にきた若山牧水の石碑がある。「酒田滞在二日、八日午前四時半河口を出る渡津丸に乗って私は酒田を立つた」新潟港についたのは午後六時半。実に十四時間の船旅である。鶴岡駅の開設は大正八年七月であり、その後大正十三年に羽越線は全線開通となった。

酒田には他にも多くの文人が訪れ著作に残されているが江戸から大正にかけては『文庫報光丘四七―四九号』『酒田に來遊した人々』で紹介されているのでご参照いただきたい。

### 参考文献

- 『酒田市史年表 改訂版』酒田市一九八八年
- 『方寸七号』酒田古文書同好会一九八二年
- 『山形県教育関係者名簿 大正四年』
- 『請求書』鉄道同盟会(酒田町資料)
- 『庄内案内記』佐藤良次著 明治三十八年
- 『庄内案内記』佐藤良次著 大正四年
- 『若山牧水全集 第六卷』『海より山より』北国紀行 増進会出版社 平成五年
- 『庄内路の探訪』三浦孝治著 一九七二年
- 『酒田市街全図』大正四年 光丘文庫デザイン
- タルアーカイブより

## 歴史公文書の保存と活用について(三)

東北公益文科大学教授  
酒田市公文書等管理委員会

門 松 秀 樹

これまで二回にわたって「歴史公文書の保存と活用について」と題して拙稿をご掲載いただいた。第一六一号では、「特定歴史公文書」を保存

することの意義を中心に、第一六二号では、「特定歴史公文書」を実際に利用するというところを中心にそれぞれ私見を述べた。

今回は、来年度に開館を予定している酒田市文化資料館における「特定歴史公文書」の取り扱いに関して、利用者の立場から寄せる期待を中心に私見を述べることにしたい。

前回、「特定歴史公文書」の閲覧に際して審査があり、資料の内容や状態によっては閲覧ができなかったり、制限されたりすることもあることと、その理由について触れた。ただ、利用者の立場に立ったとき、あらかじめ閲覧に制限がかかる資料とはどのような基準で決まってい

るかが明らかになっていく方がよい。

「情報公開法」等では、個人のプライバシーに関わる情報、法人の営業上の秘密などに関わる情報、国防や外交など国の安全に関わる情報の三項目については、歴史的資料であっても不開示情報とすることが定められている。

特に、個人情報の保護については、例えば、国立公文書館では次のような審査基準を定めて、個人情報の保護に努めている。

五〇年の保護期間を適切とする個人情報としては、  
①学歴・職歴、②所得・財産  
③採用・選考・任免、④勤務  
評定・服務、⑤人事記録がある。八〇年の保護期間を適切とする個人情報としては、  
①国籍・人種・民族、②家族・親族・婚姻、③信仰、④思想、  
⑤伝染性の疾患・身体の障害  
やその他の健康状態、⑥罰金  
以下の刑法等の犯罪歴があ

る。概ね一〇〇年を超える適切な期間の保護を定める個人情報としては、①禁固以上の刑法等の犯罪歴、②重篤な遺伝性の疾病・精神の障害やその他の健康状態がある。酒

田市における基準も恐らく、国立公文書館の基準に準拠して整備されていくことになると思われるが、あらかじめこうした基準が示されていけば、なぜ、その資料の閲覧ができないのか、あるいは、墨塗などの制限がかかるのか、利用者の立場としても納得しやすくなる。

また、「公文書管理法」の第一六条では非公開とすることができる文書について列挙されており、その中には、原本を閲覧することで破損や汚損のおそれがある場合も示されている。前回に述べた、洋紙(酸性紙)の劣化や、和紙の虫食いなどがこれに当たる。資料保護の観点からは必要な措置ではあるが、利用者の立場としては、何とか解決してほしい問題でもある。

そこで、例えば、原本の公開が困難な保存状況の場合、

デジタルカメラなどによって資料を撮影し、その画像もしくはコピーなどを閲覧するということができる、利用者としては大変にありがたい。

国立公文書館では「公文録」などの史料についてはマイクロフィルム化やデジタルアーカイブ化することで、原本を保護した上で、貴重な史料を広く閲覧することが可能となっている。また、国立国会図書館の憲政資料室では、閲覧申請が多い重要史料については、コピーを製本して室内の書架に配架し、自由に閲覧ができるようになっていく。

無論、酒田市が今すぐにこれらの機関と同等の体制で臨むというのは無理難題そのものであることは承知している。これは、酒田市においても、いずれはこうした形での資料の閲覧ができるようになる、利用者として大変喜ばしい、という単なる筆者の願望である。

さらに無理な願い事を挙げることをお許しただけるのであれば、現在、酒田市

のホームページ等で公開されている「特定歴史公文書」の目録に、資料が活字なのか手書きなのかといった情報が追記されると、利用者の利便性が高まるのではなからうか。

明治期以前の古い資料は、手書き、それも筆書きの上にくずし字といった資料もしばしば見られる。筆者も、史料の読解能力が不足していた大学生の頃は、期待して閲覧請求をしたのに、出てきた資料を見て絶望する、といったことをたびたび経験している。資料の利用者がくずし字を読める研究者ばかりとは限らず、むしろ、市民が広く利用するということを前提にするのであれば、活字なのかくずし字なのか目録の段階で分かるということも、案外、大切なことではなからうか。

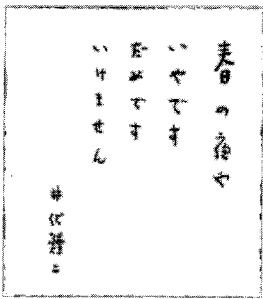
今回は、酒田市文化資料館に寄せる期待ということで、無理難題を思いつくままに述べてしまったが、文化資料館が市民にとっての知の拠点のひとつとなることを期待したい。

光丘文庫所蔵資料紹介

佐藤三郎寄贈資料と 井伏鱒二

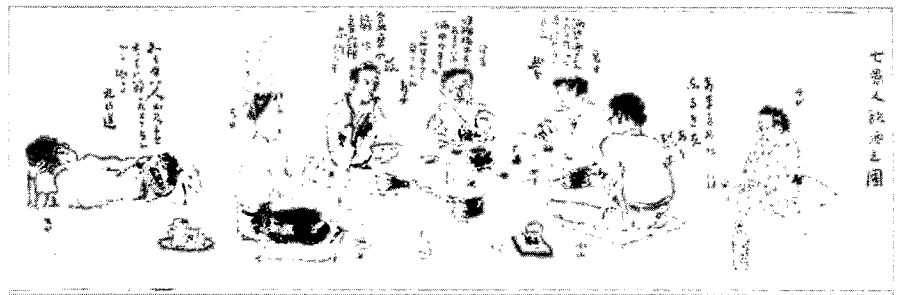
光丘文庫で頻繁に利用される資料といえば佐藤三郎寄贈資料です。郷土史研究に欠かせない新聞や雑誌はもちろん、著名な文化人との交友関係の賜物といえる品々や、三郎氏の父・佐藤良次氏が残した貴重な収集品も収蔵しています。

三郎氏と交流の深かった人に作家の井伏鱒二がいます。「七愚人飲酒之図」は、七人の文芸人が杯を傾けている様子を井伏が描いたものです。筆者井伏、小山祐士、亀井勝一郎、伊馬鶴平、大宰治、高田英之助、丸山進の風姿が味わい深い絵です。替に「酒田銘酒亀楽を飲む集り右七名昭和十五年八月十五日夜空に月あり大いに飲をつくす」とあります。

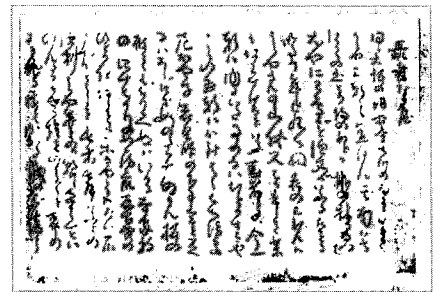


井伏鱒二色紙

井伏は色紙も残しています。三郎氏は、「井伏鱒二先生は酒田を戦前から何度も訪れている。この色紙は津軽の釣り旅の帰途ひょっこり立ち寄った時、菊水旅館の一室で小酌の折に書いてくれた。俳句ですかと愚問したら「ふられたんだよ」と先生は笑って答えた。井伏文学一流の味であろう」と解説しています。



『七愚人飲酒之図』



『春雨物語』の草稿

三郎氏の父・良次(古夢)氏は上田秋成の研究者で、数多くの秋成関連資料を所蔵していました。井伏はわざわざ「雨月物語」の初版本や『春雨物語』の草稿を見にきています。良次氏の秋成研究について井伏は「雨月物語」明治翻刻本「佐藤古夢のこと」に詳しく書いています。余談ですが、「古夢のこと」には「光丘」一六〇号に載せた高山樗牛は明治天皇の御前で奉迎文を読んだのか?の真相も書いてあります。井伏鱒二と三郎氏の親交から生まれた良著です。

※「七愚人飲酒之図」、「春雨物語」草稿は、光丘文庫デジタルアーカイブで高精細画像をご覧いただけます。

光丘文庫 所蔵展

「近世軍記物で知る合戦」と題し、八月二十八日(月)まで光丘文庫所蔵展を開催しています。



展示室

【お知らせ】

光丘文庫の閉館について

令和六年五月に閉館を予定している、酒田市文化資料館(仮称)への移転準備のため、九月三十日から閉館いたします。

【執筆者紹介】

- 岩浪 勝彦 (酒田市立資料館館長)
- 門松 秀樹 (東北公益文科大学教授・酒田市公文書等管理委員会委員)
- 藤原 由紀 (酒田市立光丘文庫調査員)
- 相蘇清太郎 (日本現代詩人会会員)

- 図書報「光丘」初頁執筆者 (一六一号から文庫報「光丘」)
- 1号「読書の思い出」 酒田市長 小山孫次郎
- 2号「本を愛すること」 教育委員長 後藤敏
- 「白旗浩蕩兄の追憶」 酒田市議 村田敏雄
- 3号「達意のコトバ」 酒田市助役 伊藤珍太郎
- 4号「回顧 光丘文庫」 前光丘文庫長 本間祐介
- 5号「図書館の想い出」 中央大学教授 斎藤信治
- 6号「海亀記」 酒田市教育長 杉原千代太
- 7号「寛書の思い出」 元光丘図書館長 佐藤公太郎
- 8号「光丘図書館所蔵の漢籍について」 酒田東高校長 渡部信治郎
- 9号「光丘文庫あれこれ」 酒田女子高 教諭 柴田恵也
- 10号「市史編纂覚書」 安祥寺住職 華園晃尊
- 11号「文庫」のころ 河北新報社論説委員 白崎慎助
- 12号「ヒマツブしの読書」 東京大学教授 斎藤栄治
- 13号「光丘図書館蔵 三鏡」 藤井康夫
- 14号 八郎と古龍「西遊草」編訳縁起酒田西高教諭 小山松勝一郎
- 15号「黄鷄」由来記 歌人・歌誌黄鷄主宰 斎藤勇
- 16号「水壁十年」 俳人・俳誌水壁主宰 秋沢猛
- 17号「フアシズムの波 思い出すま」 酒田西高教諭 藤井英治
- 18号「失なわれた愛児のこと」 鶴岡高等専門学校講師 斎藤十象
- 19号「茂吉書簡について」 酒田経済短期大学助教授 高橋元良
- 20号「憶良の歌」 歌人 鈴木敬治
- 21号「山王の森」 本間美術館副館長 佐藤三郎
- 22号「ミイラ考」 早稲田大学名誉教授 伊藤安二
- 23号「私のふるさと「山王山」」 朝日新聞東京本社企画部 若林邦三
- 24号「故森山善平について」 NHK技術本部副本部長 森山節二
- 25号「光丘文庫蔵」 版画家・美術評論家 小野忠重
- 26号「図書館随想」 酒田市教育委員長 日向直基

- 27号「読書私論」酒田市文化財調査委員 富沢 高
- 28号「日和山はるるわし」酒田市民 土門 幸
- 29号「昔ばなし」山形大学名誉教授 阿部 義
- 30号「山と川と」日本民俗学会評議員 戸川 安章
- 31号「飛鳥の遺跡」山形大学名誉教授 柏倉 亮吉
- 32号「苗子と家紋」多摩美術大学教授 伊藤 幸作
- 33号「酒田の昔話」国学院大学助教授 野村 純一
- 34号「酒田の服飾」尚絅女学院短期大学助教授 鈴木 於安
- 35号「酒田の家具指物業」家具史研究家 小泉 和子
- 36号「酒田の海船」海事代理士 中山 岩男
- 37号「遠ざかり行く郷里」東京民芸協会常任理事 白崎 俊次
- 38号「芭蕉さまと四郎さん」シナリオライター 長谷部 慶次
- 39号「日佛人情物語」あるフランス女性の死とその甥の婚禮」佛文学者 市原 豊太
- 40号「銅板葺きの屋根 全面葺替え竣功」光丘図書館長 加藤 健四郎
- 41号「酒田点字読書会 創立五十年を祝う」酒田点字読書会副会長 佐藤 正吉
- 42号「史料を尋ねて」鶴岡市史編纂委員 大瀬 敏哉
- 43号「光丘文庫の俳書」延宝期談林の前身俳書」東京大学文学部助教授 藤森 川昭
- 44号「感謝」余目町在住 佐藤 東一
- 45号「彌祭書屋俳句帖抄 合評の意義」医師・歌人 岸田 隆
- 46号「上野図書館など」音楽家 加藤 千恵
- 47号「お一話」詩人 吉野 弘
- 48号「チョウカイフスマ物語り」日本山岳会員 島中 善弥
- 49号「弘采録」の亀田鵬斎 東京大学図書館勤務 杉村 英治
- 50号「芭蕉・呂丸・重行」成城大学教授 尾形 功
- 51号「石原莞爾蔵書について」明治学院大学教授 仁科 悟郎
- 52号「光丘文庫俳書解題」国文学研究資料館館長 棚町 知彌
- 53号「大川周明博士に就いて」拓殖大学総長 高瀬 博郎
- 54号「浅野文庫蔵 諸国当城之図」酒田之図」考」山形大学名誉教授 工藤 定雄
- 55号「本、思い出」札幌市在住 渡会 信太郎
- 56号「日露戦争時代の記憶から」漆工 芸家 本間 壽華
- 57号「初めての酒田行」大正時代」庄内文化財保存協会会長 日向 文吉
- 58号「酒田米遊の茂吉」酒田短期大学長 斎藤 邦明
- 59号「祖父小倉金之助の思い出」東洋大学教授 小倉 欣一
- 60号「酒田の妻入町家」千葉大学助教授 玉井 哲雄
- 61号「開かれた図書館」東京女子大学教授 伊藤 善市
- 62号「私と酒田」銅板画家 木村 茂
- 63号「消えない史実の息づかい」水戸部 浩子
- 64号「写真集」途かなる祖国」評ニッコール会員 鑑谷 和雄
- 65号「昔話の中の本問さま」立川町歴史民俗資料館館長 清野 久雄
- 66号「西羽博物図譜の魅力と特色」慶応義塾大学生物学教室 磯野 直秀
- 67号「ある下級藩士の生誕」首直父貞栄のこと」酒田市社会教育委員 山岸 貞一
- 68号「磯雄老追悼」画家 堀内 規次
- 69号「光丘文庫の思い出」庄内館専務理事 大川 龍太郎
- 70号「わらべごころ」歌人 土岐 千也重
- 71号「佐藤藤左とその一門」酒田民俗学会会長 池田 宗機
- 72号「一葉と図書館」正徳寺住職 佐藤 道也
- 73号「瀧庵不玉の妻」本間美術館学芸員 佐藤 七郎
- 74号「酒田と大石田」山形新聞庄内総支社長 伊藤 浩一
- 75号「無用の用」酒田短期大学講師 塚本 敏
- 76号「光丘文庫」竣工六十五周年にあたり」光丘文庫長 佐々木 金三
- 77号「忘れていた人糞肥料のこと」土門 幸記念館館長 三木 淳
- 78号「郵便ノート」高山 順吉
- 79号「読書はせいたくなれし」佐藤 善一
- 80号「消えてゆく小字名」斎藤 晴記
- 81号「酒田市立光丘文庫」名の一考察」酒田市立図書館古典籍調査員 平野 助松
- 82号「河北省承德」佐藤 善三
- 83号「文化と地方分権」相馬 大作
- 84号「本の匂い」図書館協議会委員 川島 清一
- 85号「読書の回顧」前酒田市立資料館館長 長岡 康雄
- 86号「こは連想」遊佐町文化財保護審議委員 須藤 鏡門
- 87号「旅も個性」画家 里内 直次
- 88号「終着駅」元酒田市教育長 松本 茂雄
- 89号「文化遺産」酒田古文書同好会会長 佐藤 信一
- 90号「ジュニア版」酒田の歴史」副読本編集委員 今井 昭作
- 91号「女別式」随筆家 大内 隆
- 92号「不思議なひろがり」酒田東高亀城同窓会長 小松 久雄
- 93号「土屋竹雨先生と酒田」鶴岡市致道博物館副館長 酒井 忠治
- 94号「山草讃歌」山形県社会教育委員 佐藤 三男治
- 95号「俳句との出会い」山形県俳人協会副会長 小野 百合子
- 96号「書との出会い」日本刻字協会理事 審査委員 富樫 翠峰
- 97号「わたしの児童文学周辺から」児童文学者 佐々木 悦
- 98号「庄内人物劇画展からの発信」酒田中央高校教諭 土岐 田正勝
- 99号「わが国」博物館の今昔」本間美術館館長 小松 成夫
- 100号「図書館報」光丘」一〇〇号発刊に寄せて」酒田市長 大沼 昭
- 101号「マイナーポエットの巨星」秋澤 猛」俳人 齋藤 慎爾
- 102号「ペンネーム、雅号考」酒田市美術館館長 安井 取蔵
- 103号「又益野学のこと」酒田市立資料館元館長 佐藤 豊光
- 104号「萩原重逸の崎人伝説」丸岡 誠一
- 105号「竹内淇洲記念館完成」日本将棋連盟公認将棋道師範 土岐 田勝弘
- 106号「光丘翁と公益の理念」前光丘文庫長 高瀬 博
- 107号「ウーエキゴ考(五大効用)」元酒田市立琢成小学校校長 金野 宗信
- 108号「文化都市をめざして」酒田市芸術文化協会理事 名和 収
- 109号「はじめての村の郷土史発刊に携わって」元亀城小学校校長 後藤 雄太郎
- 110号「理科副読本」酒田の自然」編集編末記 元酒田東高等学校 五十嵐 敬司
- 111号「想い」元大通商店街理事長 阿部 彌太郎
- 112号「心に残る書」本阿弥切」書家 佐高 青舟
- 113号「この街が好きだから」喫茶店ケルンマスター 井山 計一
- 114号「本、本、本に埋まる」東北公益文科大学副学長 大島 美恵子
- 115号「服のお茶で新しい感動を」茶道裏千家 小野 孝一
- 116号「潮風が薫る地に写真文化の華ひらく」全酒田写真連盟会長 白畑 晋
- 117号「音楽の溢れる町酒田に」日本演奏連盟会員・声楽家 関 矢順
- 118号「文庫長、良瀬さんの思い出」十川 禮三
- 119号「夕顔、芹、菜蝶」松山町阿部記念館館長 門山 俊明
- 120号「泉民歌」最上川」の作曲家」前酒田市立光丘文庫長 前田 博
- 121号「酒田のフランス料理」レストラン 櫻総料理長・庄内洋食調理師会会長 大田 政宏
- 122号「星野美津子創作人形」スピンドル主宰 星野 美津子
- 123号「光丘文庫までたった長い道」庄内バリオ研修センター所長 山口 彦之
- 124号「公益」の根っこにあるもの」東北公益文科大学教授・同大学院研究科長 長瀬 啓亮
- 125号「布で綴る優しい時間」キルトスクエア主宰 菅原 真理子
- 126号「喜寿の愛」庄内銀行顧問 鏡谷 誠一
- 127号「酒商百周年と中等教育の始まり」元県立酒田商業高等学校校長 原田 清廣
- 128号「食への関心を高めたい」土里 夢の会長 佐藤 信子
- 129号「春風を呼ぶ仙台フィルハーモニー」スプリングコンサート」酒田共同火力発電株式会社相談役 高橋 弘道
- 130号「ある酒田っ子の生涯」ノン・フィクション作家 岡田 芳郎
- 131号「光丘図書館のことなど」作家 北重人
- 132号「春雨草紙」の思い出」東京大学大学院教授 長島 弘明
- 133号「我が人が人格形成の場としての図書館の思い出」酒田市市長 阿部 寿一
- 134号「スプーン」いっばいの愛と感謝をこめて」月刊「SPOON」編集長 佐藤 晶子
- 135号「社会学に出合った」一九七三年の光丘図書館」日本大学教授 仲川 秀樹
- 136号「女人来迎」庄内の女たち」作家 久木 綾子
- 137号「酒田方言あれこれ」郷土史家 田村 寛三
- 138号「お雛様」考」酒田あいおい工藤美術館館長 工藤 幸治
- 139号「光丘文庫の思い出」国文学研究資料館教授 鈴木 淳
- 140号「酒田市立光丘文庫蔵「平家曲集」について」新潟大学教授 鈴木 孝庸
- 141号「庄内地震と震災予防調査会」立命館大学教授 北原 希子
- 142号「離島・飛鳥で豊かさは何かを考えた」元酒田市飛鳥診療所所長 杉山 誠
- 143号「対象を知る」土門 幸に学んで」公益財団法人土門幸記念館理事長 高橋 修
- 144号「酒田のピロリ菌」酒田地区医師会十全堂会長 本間 清和
- 145号「節目節目に酒田の商家の行事」小野 太右衛門
- 146号「長崎に本間郡兵衛の足跡を追って」医師 本間 利美
- 147号「松山能の歴史と現在の活動」松山能伝承団体「松風社」会長 榎本 和介
- 148号「庄内刺し子に出逢って」平田 さしこの会長 高橋 ひで
- 149号「八幡よみかきせ隊の活動」八幡よみかきせ隊代表 瀬野 千恵子
- 150号「創刊一五〇号を迎えて」酒田市丸山 至
- 151号「スマモバ世代と赤ちゃんへの読み聞かせ」(一社)子どもの読書サポートアシンド代表理事・絵本専門士 加藤 美穂子
- 152号「文化を大切にしよう」ということ」画家 佐藤 真生
- 153号「徳の交わり」和「南洲翁遺訓」公益財団法人庄内南洲会理事長 水野 貞吉
- 154号「将棋と読書と出版」公益社団法人日本将棋連盟・プロ棋士七段 阿部 健治郎
- 155号「漂として生きる」酒田南高等学校校長 中原 浩子
- 156号「染色補正土」中谷 しみき店中 谷 敏
- 157号「レージをめぐる旅」山容病院院長 小林 和人
- 158号「切り開く世界への旅」國學院大学教授 平藤 喜久子
- 159号「港町回想」若葉旅館専務取締役 矢野 慶汰
- 160号「山居倉庫の建設」公益財団法人本間美術館事務長 清野 誠
- 161号「新しき革袋に」詩人・元光丘文庫長 高瀬 博
- 162号「酒田船管の復興と」ものづくりに」への想い 加藤 木工 加藤 渉

発行 酒田市文化政策課 酒田市立光丘文庫  
 酒田市本町二丁目二番四五号 電話(24)二九九四番  
 酒田市中町一丁目四番一〇号 電話(22)〇五五一番 印刷 明徴出版(有)